

ロッキの野外キャンプ

金沢青少年教育センター代表

谷川 哲夫



小学六年生から成人までの会員を対象に行なわれる金沢青少年教育センター（KYEC）の野外教育は、国の内外を問わず、自然の中での共同生活を通して自立心と社会性を育て、そこに生きる人々の生活に触れ、異質な文化を理解することによって、平和にしかもたくましく生きることを目的としている。この点でカナダは最も適する国と考え、一九七九年夏の三週間の下見に始まり、翌八〇年、そして八三年と、延べ三十四名がロッキを中心にキャンプを行なった。今年の夏は、三回目のキャンプを予定している。以下は、八三年七月二十七日から八月十三日までの、第二回キャンプの体験報告である。

フォレスト・ローズ

キャンプ場

バンクーバーからBC鉄道で北へ十四時間、峡谷美を堪能しながら着いたプリンスジョージは、広々とした木材の町だ。レンタカー二台で、二百キロほど南にあるゴールドラッシュ時代に栄えた史跡パークビルに向かった。容赦なく照りつける真夏の陽は暑いが、風はとても爽やかだ。

ピクトリア出身のカナダ青年も含めて中学生、大学生、大人の混成グループ十二名は、ワイリアムズ・クリークの辺りの小さなキャンプ場にテントを張る。プ

リンズ・ジョージで購入したパン、チーズ、ハム、野菜、果物をテーブルに並べ、払っても払ってもまといつくブラックフライに悩まされながら夕食の仕度が始まった。

給水場の大型手押しポンプを持て余している婦人にお手伝いを申し出て、感謝される。夜更けると満天の星、昼とは違って変わってひどく冷える。寝袋から目だけ覗かせて、徹夜でスターウオッチングするのだという高校生二人を河原に残して、引上げた。キャンピングカーやモーターホームの人々は、すでに寝静まっていた。

パードン湖畔の

ピクニック・グラウンド

国道16号イエローヘッド・ハイウェイから少し入ったパードン湖畔は、日曜の午後とて、近隣の家族連れがおしゃべり、食事、ヨットやボート、水浴びなどを楽しんでいる。

レンジャーから、他の人々が帰ってからテントを建てること、明朝八時までに撤収することを約束の上で特別の許可を



得て、唯一空いていたピクニック・テーブルを占領させていた。ファイア・ブレースは鉄製の回転式で、風向きによって炊口を変えられるという便利さだ。薪の使用は自由。胸に「神風」と書いたTシャツを着た日本びいきの青年が話しかける。ほろ酔いでご機嫌の婦人が、明日ヨットに招待下さるという。私は何人かをさそってやぶに入り、ラズベリーを摘む。夜遅く、遠くから、泳ぎの水音に混じって人声が聞こえてくる。

ロブソンの

ゲストラランチ

ハイウェイ近くの小さな町で見つけた私設の野生動物博物館を見学した。ロッキの様々な動物——クマ、ムース、エルク、シープ、ポークュバインなどが、剥製で展示されていて興味深かった。真正面に堂々と立ちはだかるロッキの最高峰マウント・ロブソン（三九五四メートル）に向かって走る。

牧場で、オレンジ系の色白の女主人コクレインさんが、私たちの到着をにこやかに迎えて下さった。今日はシャワーつ